

オープンイノベーションに向けた〈新しいインターンシップ〉のかたち —不確実性の高い社会におけるイノベーション人材とは—

2019年11月14日 14:30~18:00 東京大学弥生講堂 一条ホール

本協議会主催のシンポジウム「オープンイノベーションに向けた〈新しいインターンシップ〉のかたち—不確実性の高い社会におけるイノベーション人材とは—」には、企業関係者33名、大学関係者40名、官庁・団体から13名、総勢94名の皆さまにご参加をいただきました。本事業が、研究インターンシップの普及・推進を通して、多様な場で活躍できる人材育成と共にイノベーション創出を志向する取組みであることを、参加者の皆さまに深くご理解をいただく機会となりました。

(敬称略)

開会のご挨拶

一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会
代表理事 北野正雄(京都大学理事・副学長)



シンポジウム参加者およびご来賓への謝辞に続き、協議会の設立背景と意義についてご報告いただきました。本事業が学生にとって、自身の能力を異分野でどのように活かせるか試すことのできる「他流試合」として意義をもち、成果を積み上げてきたことをご紹介いただきました。

ご来賓挨拶・ご講演

経済産業省 産業技術環境局長

飯田祐二



日本の産業界が新たな技術に対応し、オープンイノベーションを実現する上で、研究力強化につながる博士人材・若手研究者の育成を重要課題として言及されました。その意味で、本事業が学生にとって、外部との連携を経験できる重要な機会を提供しているとしてその意義をお話いただきました。

文部科学省 高等教育局専門教育課企画官

西山崇志



実務型研究インターンシップ(仮称)についてご紹介いただきました。本案件の目的として①研究遂行の基礎的な素養・能力を持った学生のインターンシップ効果の最大化、②卒業・終了後の通年採用の活発化を見据えた対応、③大学院段階の教育研究の実質化が挙げられました。その特徴として、修士課程・博士課程において長期インターンシップを課程修了の条件として組み入れている点、また実施については、導入を志向する大学、企業に対して先行的・試行的に行うなど、試案としての方向性をお話いただきました。

本協議会の取組みについて

(一社)産学協働イノベーション人材育成協議会 事業責任者 藤森義弘

事業責任者の藤森より、協議会による事業の成果、取り組み、中長期ビジョンについて説明いたしました。特に研究インターンシップの目的・到達点として、トランスファラブルスキルRISEの内容、運用、メリットについて触れながら、協議会は学生、大学、企業が常にWin-Winとなれるような研究インターンシップを推進していくことを説明いたしました。

基調講演 「不確実性の高い社会におけるイノベーション人材とは」

東京大学公共政策大学院教授/慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科教授 鈴木寛



今後、非連続なイノベーションを実現する上では、多様な博士人材、また、その人材像として想定外・板挟み・修羅場と向き合う力を身につける重要性についてお話いただきました。VUCA(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)の時代においては、未知を前に恐れず、危機を危険と同時に機会と捉える強い決意など非連続な知恵がイノベティブな人材に求められ、そのためには、AIで解けない難問と向き合い続ける力、板挟みの想定外に向き合える力、対立やジレンマを克服する力を獲得することが必要であり、こうした力を涵養するにはPBLやインターンシップが有効とお話をされました。PBLやインターンシップでは、学生が当事者として意見・利害の対立、トレードオフと向き合う場が与えられ、プロジェクトを達成するために、それらの課題に対して優先順位をつけながら、対応し続けることが求められる。学生はインターンシップを通して実際の問題解決をめぐる貴重な経験を得られるとして、本事業を評価いただきました。

また、インターンシップの意義として、福沢諭吉先生の言葉を引用して「学問は事をなすの術なり。実地に接して事に慣るるに非ざれば決して勇力を生ずべからず」と紹介いただきました。

インターンシップ参加OG、学生の体験報告

研究インターンシップの体験報告として、インターンシップOG 澤井様(ダイキン工業)、学生 竹尾様(京都大学D3)、田口様(東京工業大学D2)より、それぞれダイキン工業、三菱重工業、大日本印刷での実習を通じて得られた気づきや成果、キャリアパスの築き方についてお話をいただきました。得られた気づきとして、「大学、企業による研究の接点を知ることができた」、「研究への取り組み姿勢を改めて学べた」、「異なるバックグラウンドをもつメンバーのなかで、協働することでコミュニケーションが鍛えられた」という声が挙げられました。また、実習後には「インターンシップで得られた成果をもとに博士論文を執筆できた」、「修士時代にうまくいかなかった実験に再チャレンジして、非常にうまくいった」といった具体的な成果が示されました。一方、受入企業様からは、研究インターンシップについて「企業にない技術・視点が示され、刺激が得られた」、「大学・企業の共同研究に発展した」、「これまで以上に関与しようという機運が高まっている」という評価・コメントをいただきました。

パネル討論 「研究インターンシップで切り拓く私と社会のミライ」

モデレーター:大阪大学 CO デザインセンター教授

小林傳司



大学

鈴木 寛

企業

田宮直彦

日立金属株式会社
執行役常務

古藤 悟

三菱電機株式会社
先端技術総合研究所技術顧問

OG・学生

澤井伽奈

ダイキン工業株式会社
テク/ロジイノベーションセンター

竹尾英俊(京都大学大学院 D3)

田口 諒 (東京工業大学物質理工学院 D2)

モデレーターの小林先生から、インターンシップに参加された学生、OGの目線から意義と課題を探り出すというアプローチをしていただきました。インターンシップを通して、時間管理、コミュニケーション能力、social relevance(社会との関係)について理解を深めることが

できた、といった共通の体験談について、これらのスキルを大学の中で身につけることは可能か、という問いに対して、コミュニケーション能力は分野によっては可能かもしれないが、他の2つについては非常に困難だという意見が多く、インターンシップの意義を浮き彫りにしていただきました。鈴木先生からは、教養部段階から博士課程の段階まで、大学教育の中で他分野の研究手法の特徴を比較・理解することの重要性が指摘され、リーディング大学院の意義に言及されました。学生、OGからは、学術振興会特別研究員となった博士課程の学生がインターンシップに参加する際、制度上、専門分野から離れた研究をすることができないという問題提起がありました。さらに、学生、OGから、企業における博士人材に対するニーズや活用について切実な要望があり、これに対して、最近の大学院教育改革の方向性や成果を大学はしっかり企業に示し、企業側は、そういったことを採用部門だけでなく全社的に理解する必要があるとの見解が示されました。

閉会のご挨拶

東レ株式会社 理事 吉川正人

本シンポジウムの振り返りとともに、ご登壇者の方々への謝辞を述べていただきました。会員大学・企業関係者の皆様へ、本事業へのご理解とご協力をより一層、戴きたい旨、またご賛同いただける企業様のご入会をお願いし、シンポジウムを終了いたしました。

一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会(C-ENGINE)